

# 文学にみるラテンアメリカ政治

馬場 香織

『ラテンアメリカ（メキシコ）政治』

ラテンアメリカの文学は、当然といえば当然だが、ラテンアメリカの現実社会に埋め込まれている。このことは、当時ラテンアメリカ政治（史）を勉強し始めたばかりの大学四年生の筆者にとって、即物的には勉強に役立つ発見であった。ラテンアメリカにおける絶え間ない抑圧と内戦の歴史も、家父長的な農村社会の構図も、すべて文学作品に書いてある。教科書に出てくる史実や政治学の専門用語を、リアルで共感できるものとして想像するうえで、文学は信頼できる友であった。

もともと、豊かな文学作品をその社会性、政治性のみによって切り取ることは、明らかに一面的に過ぎる。チェコの作家ミラン・クンデラが、その名著『冗談』について「あれはラブストーリーだ」と語ったように、共産党独裁体制

も家父長的な社会構造も、深い人間心理や存在を描き出すための「舞台装置」に過ぎないともいえる。しかし筆者には、二〇世紀ラテンアメリカ文学の挑戦が、ある非常に抑圧的な政治的制約のなかで、権力への糾弾を試みる文学のぎりぎりの選択だったようにも思えてならない。

本稿では、筆者の独断により二〇世紀ラテンアメリカ政治史の諸相を描き出すと思われる三編を選び、政治学を学ぶ者の視点から紹介していきたい。世界的に文学的価値の知られたこれらの作品を政治史的示唆の観点から眺めることが、的外れな冒険に過ぎないことは重々承知しているが、何より読書は掛け値なしに自由な営みなのだから、多様な読み方がまあ許されるだろうと信じて筆を進める。

## ●階級、イデオロギーとチリの政治変動

イサベル・アジェンデの『精霊たちの家』（木村榮一訳、河出書房新社、二〇〇九年）の「主要脇役」たるエステーバン・トゥルエバは、その生い立ちにも強く規定される形で、保守的な思想を持つ中規模農園主となった。トゥルエバが、この時代のチリで何を考え、行動し、歴史の形成に加担しつつもそのうねりのなかでどう変化していったのかを探ることは、階級やイデオロギーの意味を人間に引きつけて考えるうえで示唆的である。トゥルエバはいう。

「誰がなんと言おうが、わたしは申し分のない主人だったと思って。昔の荒れ果てたラス・トレス・マリーアスを知っている人間が、現在の立派な農場をみたら、なるほどと納得するだろう。だから、孫娘の奴が階級闘争がどうのこうのと言いつても聞く気にはなれんのだ。あわれな農民たちは今、五〇年前よりもはるかに苦しい生活を強いられているが、もとはと言えああの農業改革（筆者注：農地改革）というやつがなにもかも台なしにしてしまったのだ。」

支配する側の論理に過ぎないといえども、彼らが単なる抑圧と搾取のロジックからのみ行動していたわけではなく、ある秩序の捉え方（あるいはイデオロギー）がその基盤に存在していたことを明確に示す発言である。また、支配される側の人間にとって、従属と引き換えに生活の保証を選ぶことは十分現実的な選択だった。

しかしこうした農村社会の秩序は、支配される側の「無知」を前提としていた。一九七〇年にアジェンデ左派政権が発足すると、チリの政治社会的分極化は加速し、一九七三年に軍事クーデタが勃発する。保守の政治家として左翼政権の打倒を狙っていたトゥルエバだったが、徐々に軍政は間違っていたと考えるようになる。次の描写は、左右イデオロギーの相対性

を読者に考えさせるものだろう。

「(トゥルエバは) 軍人たちはマルクス主義独裁を排除するため行動を起こしたが、結果的にはそれ以上に厳格な独裁制を生み出すことになり、どうやらそれがこの先百年くらいは続きそうな気配だと言って、嘆いた。生まれて初めて彼は、自分のまちがいを認めた。(中略) 権力を失ったことを悲しんでいたのではなく、祖国の将来を嘆いて泣いていたのだ。」

## ●歴史的分岐点におけるアクターの選択

マリオ・バルガス・リョサの『チボの狂宴』(八重樫克彦・八重樫由貴子訳、作品社、二〇一〇年)は、一九三〇年から三一年間にわたり強固な独裁を敷いた、ドミニカ共和国のトゥルヒーリョ体制を扱った小説である。物語の核心的主題とあまり関係のないところで筆者の印象に残ったのは、トゥルヒーリョ暗殺(一九六一年)当時の大統領バラゲールが歴史上果たした役割についてであった。小説中でも描かれるとおり、バラゲールはトゥルヒーリョの忠実な下僕として三一年間彼に仕え、「操り大統領」としての役割も甘

んじて受け入れてきた人物である。しかし、トゥルヒーリョ暗殺後のバラゲールは、政権の飾りから責務に実をともなう国家元首へと変貌を遂げる。

権力の空白によって政治が流動化するとき、中心的な政治アクターの選択は歴史的分岐に決定的な影響を与えるのだろうか。たしかに、仮にバラゲールが軍幹部によるライリー司教殺害の陰謀を食い止めることができず、アメリカ海軍の上陸を許していたならば、その後の歴史は大きく変わっていたかもしれない。バルガス・リョサは、こうしたアクターの個々の選択の積み重ねが歴史を規定してきたことを重視しているように読める(小説がミクロな人間を描くものであれば、ある程度当然だが)。しかし、政治学的な観点からより長期的に眺めれば、別の見方も可能かもしれない。クーデタ、内戦、政権に返り咲いたバラゲールの独裁強化というドミニカ共和国政治のその後の展開は、より長期的に変わらない何か(「構造」が歴史(のサイクル)を規定することを示唆するからである。歴史をつくるのはアクターなのか構造なのかという政治学のクラシックな

問いが、いきいきと浮かび上がる。

## ●内乱下の秩序、死と生

最後に紹介するのは、カルロス・フエンテスの短編小説「生命線」『フエンテス短篇集アウラ・純な魂』(木村榮一訳 所収、岩波文庫、一九九五年)である。一九一〇年に始まるメキシコ革命の権力争いの下では、今日の指導者が明日は没落し、仲間が敵に変わるといふ無秩序こそが秩序であった。ベレン監獄を命からがら脱獄し、サパータ派の分遣隊との合流を望んでいた主人公ヘルバシオだったが、たどり着いた野営地の部隊を指揮する將軍に、ウエルタの裏切りによりマデーロ政権が転覆したとの事実を告げられる。

「誰があの男(筆者注・マデーロ)を銃殺刑に処したと思うね。わが將軍、ビクトリアーノ・ウエルタだよ。現在はウエルタ將軍が我々の指導者になっている……」

こうしてヘルバシオは、ベレン監獄に連れ戻され、最終的に処刑される。ヘルバシオのように名もない多くの兵士たちが、内乱の大きな流れに巻き込まれて死んでいった。そこに「革命の理念」のよいうなものは、はつきりいつて見当

たらない。仲間に向けたヘルバシオの次の言葉が印象的だった。

「いったん革命に足を踏み入れたら、あれこれうるさく問い糾してもしょうがない。自分の任務を果たす。それがすべてだ。」

こうした極限的な「秩序」のなかで、ヘルバシオは「死がすべてである以上、生というのはしよせん例外でしかない」という死生観にいたる。革命を生き、そして死んでいくことがどのようなことだったのかを考えさせられる。

## ●おわりに

以上紹介した三冊は、いずれもラテンアメリカ政治学を学ぶ者なら必修の史実や概念を扱ったものである。もちろん、ここでの紹介は作品の文学的主题とはかけ離れたものだし、そもそも小説はフィクションなのだが、日本から遠く離れた異国の歴史を熟知できるものとして想像し、研究のアイデアを広げるうえでも、文学作品の参照は非常に有用だと思う。作品自体を楽しみながらの活用を、ぜひお奨めしたい。

(ばば かおり/アジア経済研究所 ラテンアメリカ研究グループ)